

研 究 分 野	資源管理	部名	資源管理部
研 究 課 題 名	多元的資源管理型漁業推進事業 イカナゴ資源調査		
予 算 区 分	漁業調整費 (国1/2)		
試験研究実施年度・研究期間	H.15 ~ H.19		
担 当	伊藤 欣吾		
協 力 ・ 分 担 関 係	水産振興課		

〈目的〉

イカナゴの資源状態や生態を調査することによって、下北半島西部沿岸と津軽半島東部沿岸で策定されたイカナゴ資源管理計画に基づき、津軽海峡西部全体での広域的な資源管理をめざす。

〈試験研究方法〉

(1) 産卵状況調査

平館村と佐井村の地先において、イカナゴの産卵状況を調べた。

(2) 稚仔分布調査

津軽海峡西部～陸奥湾の海域 11 調査地点において、2003 年 1 月 23 日～4 月 16 日の期間、新型稚魚ネット水平 10 分曳とボンゴネット往復傾斜曳を行い、イカナゴ稚仔の分布密度を推定した

(3) 漁獲量調査

当海域の 7 漁協において、日別の詳細な漁獲量と金額を調べた。

(4) 海洋環境調査

漁場の海面水温、佐井村地先水深 25m 地点の底層水温を観測した。

(5) 夏期の分布調査

2003 年 8 月 27～31 日に津軽海峡海域において試験船青鵬丸のオッターコントロールによる海底曳を行い、イカナゴの夏期の分布状況を調べた。

〈結果の概要・要約〉

調査結果を基にイカナゴ漁況予測を発表した。予測の方法は稚仔分布密度と漁獲量の相関関係(図 1)を基本とし、夏期の成魚の分布密度(図 2)、水温の年偏差および産卵状況から総合的に判断した。2003 年漁期の予測は前年を下回ると発表し、結果として漁獲量は前年の 65%に減少した(図 3)。これまで新型稚魚ネットの水平曳により稚仔分布密度を求めてきたが、定量採集の観点から問題があると考えられたので、2002 年からボンゴネットの往復傾斜曳を併用し、より精度の高い分布密度の推定を試みた(図 4)。また、ふ化から漁獲加入までの生残率と餌料環境の関係を明らかにするため、2002 年から動物プランクトンの分布調査を開始し、より精度の高い漁況予測の構築を図る。

資源管理を推進するため、2003 年 4 月 23 日に下北半島西部沿岸と津軽半島東部沿岸の合同のイカナゴ漁業検討会が前年に引き続いて開催した。これまでの調査の結果から、当海域においてイカナゴが再生産されている事、両半島沿岸で漁獲されるイカナゴは同一資源の可能性が高い事などを報告し、資源を持続的に維持管理して漁業経営の安定を図ることを協議した。具体的には、単価が安くなる大きさの魚体になったら獲らないこと、親魚を獲らないことが挙げられた。今後は、資源予測と漁獲状況の推移を総合的に判断し、漁期終盤に漁業者の話合いにより終漁日を決める検討会の開催していく予定。

〈主要成果の具体的なデータ〉

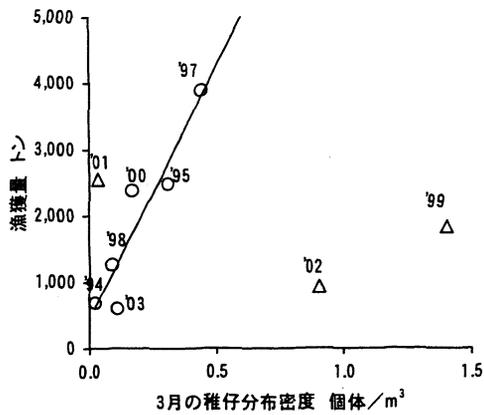


図1 3月の稚仔分布密度と漁獲量との関係

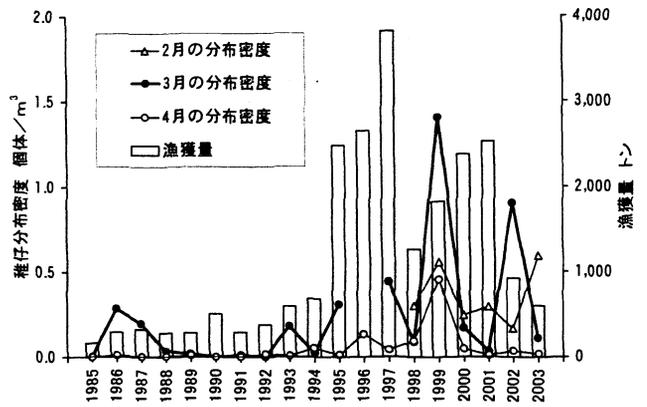


図3 イカナゴ稚仔分布密度（陸奥湾湾口部：新型稚魚ネット）とイカナゴ漁獲量（三厩村～陸奥湾～佐井村）の推移

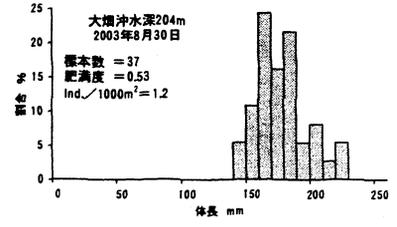
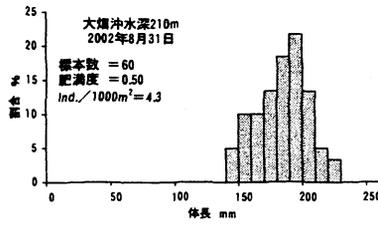
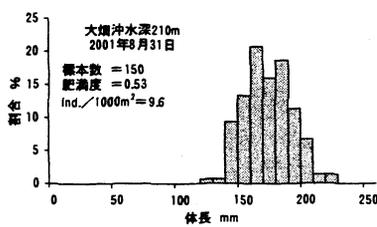


図2 夏期分布調査によるイカナゴの体長組成

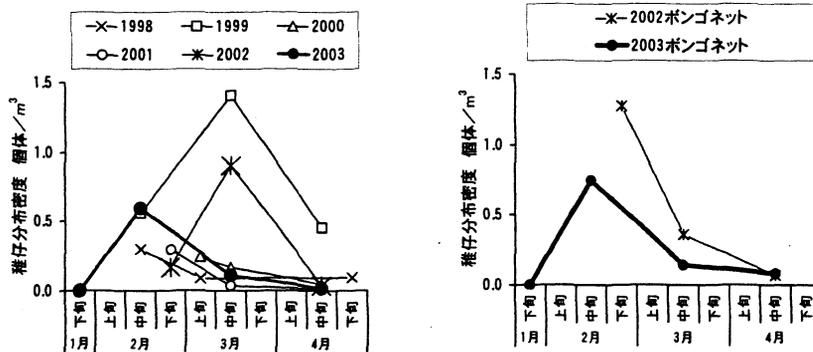


図4 イカナゴ稚仔分布密度（左図：新型稚魚ネット水平曳、右図：ボンゴネット往復傾斜曳）

〈今後の問題点〉

資源予測を行う上で、夏期における成魚の分布域を大畑沖以外の海域で発見する必要がある。また、ふ化から漁獲加入までの生残率と餌料環境との関係を明らかにする必要がある。

〈次年度の具体的計画〉

今年度と同様の調査に加え、春季のクロロフィルや動物プランクトンの分布量とイカナゴ稚魚の生残率との関係を解析する。

〈結果の発表・活用状況等〉

青森県（2004）平成15年度多元的資源管理型漁業推進事業報告書。（印刷中）